

さまざまな物議を醸した北京五輪が終了し、朝夕の涼風が心地よい秋がすぐそこまで来た。この夏凄まじかったのは、幾度となく襲来した激しい雷雨。まるで、熱帯地方のような様だった。これが原因で尊い命もたくさん奪われた。もはや自然が勝手に暴走する「異常気象」ではない、人為的で社会的な「異常事態」である。この問題は、グローバリズムの暴走が生み出した、もっとも最広義の課題だ。裏返せば、反グローバリズム運動の主戦場として、環境に関わるテーマを全面的に打ち出し、経済システムの再構築に結んでいかなければならない。

法制化運動は、法案作りで一進一退が続いてきたが、いよいよ臨時国会の日程も固まり、次の段階へ作業を進めなければならない。この間全国で取り組まれている地方議会での意見書採択の取り組みは、新たな段階を拓く勢いだ。6月議会までの採択議会は33だが、働きかけが行われている議会数は700に近づいている。その3割で通っても200を越える。地方議会議員のほうが、国会議員より法制化の取り組みや中身を知っている、という逆転現象も生まれている。数の課題として、国会に対してプレッシャーを与えていき、早期に求める内容で法制化実現を勝ち取る。さらに、法制化後の「活かす」取り組みへの助走として、一人でも多くの地方議員・自治体職員に伝える意義は計り知れない大きさがある。その中で特徴的なのは、地方に行くほど食・農・環境分野

での法制度活用の青写真が現実化しつつあることである。産業的なことだけでなく、まちやムラの再生を担う人々のあり方、組織化の具体像が話題となり、法制度の理解も早まっているように思う。村民出資型の株式会社や、全村民参加のNPOなどがつくられているが、その目的や理念からも、協同労働（協同組合）方式が最も適しているのではないか。そして、こうした組織化を可能にする法律の中身もしっかり組み入れなければならないと痛感する。そんな実践上の展望も踏まえ、8/30には「食農環境事業推進フォーラム」を開催する。

この夏、久しぶりに甲子園に足を運んだ。
「雲は湧き 光あふれて 天高く 純白の球
今日ぞ飛ぶ 若人よ いざ まなじりは
歓呼にこたえ いさぎよし 微笑む希望
ああ栄冠は 君に輝く」。無垢な心の再発見に、今一度自らを見つめ直す営みを自覚させられた。誰もが心の中の奥底に純真で無垢な魂を有しているのであれば、それを覆い隠し茂る草木を間伐しよう。時代が進み、組織が発展しても、純真で無垢な協同労働の心が輝きを消さないように、法制化も捉え返したい。

夏の舞台も終わりに近づき、選挙風という人為現象も起きてきた。異常事態を表明する自然もまた、人為的なものである。「人のため」「生命のため」の心ある社会創造のために、労働が持つ可能性と価値、そして結びつきの普遍性を問いながら、実る秋を迎えたい。